

THE AMERICAS TODAY



天理大学アメリカス学会ニューズレター

NO. 74

2016年5月

Special to the Newsletter

アメリカ大統領予備選挙

—クルーズ候補の敗北とトランプ候補の宗教右派戦略—

東馬場 郁生

5月2日、インディアナ州の共和党予備選挙でテッド・クルーズ候補がドナルド・トランプ候補に敗れ、今後の大統領選挙からの撤退を表明した。ライバルの敗北宣言によって、トランプ氏が共和党の大統領候補に選出されることがほぼ確実にになった。これはアメリカ国内外に衝撃を与えたが、同時に大きなため息も聞こえてくるようだった。翌日の *The New York Times* 紙で、「結党 160 年の政党が自殺しようとしている」と表現したのは、保守系シンクタンク「倫理と公共政策センター」のヘンリー・オルセンである。

クルーズ氏は、テキサス州選出の上院議員で、宗教右派（キリスト教右派）の支持を得ていた。アメリカにおける宗教右派と共和党との関係は、過去 30 年以上にわたりよく知られるところだ。クルーズ氏の敗北とトランプ氏の勝利は、宗教右派の関心や政治的動向について何を語っているのか。とりわけ、今回、宗教右派の票はいかにしてトランプ氏に流れたのか。

予測されていたクルーズ候補の苦戦と敗北

今回の選挙でクルーズ氏が苦戦することは、彼の支持母体である宗教右派の近年の動向から、事前に予測されていた。昨年 12 月、*The Atlantic* 誌は、今回の状況と 1980 年にレーガン氏が宗教右派の支持を得て大統領に当選したときと比較していた。

1980 年当時、宗教右派の戸惑いの矛先は、1960 年代から 70 年代にかけて展開されたアメリカの大規模な社会変革に向けられていた。公民権運動、フェミニスト運動、同性愛者の権利を求める運動や性革命などが引き起こされていた。さらには連邦裁判所による公立学校での祈りの禁止や、避妊と中絶の合法化もあった。アメリカが誤った方向へ姿を変え、

もはやついて行けなくなるのではとの不安と怒りが保守派キリスト者にはあった。

今回、一層のリベラル化がすすむアメリカ社会に対して、宗教右派が同様の「怒り」を覚えているという。20世紀後半に宗教右派が嘆いていた離婚、アルコール、マリファナ、など多くの「悪しき事」は、今では当時ほどタブー視されていない。初期の宗教右派の指導者を激怒させた公民権運動はアフリカ系アメリカ人の大統領を誕生させ、同性婚は今や全50州で合法化され、トランスジェンダーの人権さえ全米規模で論議されるようになっている。

保守派キリスト者が国家の将来に対し抱く不安と怒りは、これまでと同様に強いものであろう。そして、もし彼らの社会に対する「怒り」が以前のように社会への「影響力」に転化されるのであれば、クルーズ候補は勝利を得ただろう。しかし現在、宗教右派はそのような影響力は持ち得ない、というのがすでに昨年度からの大抵のメディアの見方であった。事実、大統領選挙においても、2004年にジョージ W. ブッシュ大統領を再選に導いてから以降は、彼らの影響力は下がり続けている。ちなみに、ブッシュ氏再選の時、白人福音派の78%が彼に投票し、それは彼の得票数全体の36%に上ったという (*The New York Times*, May 10, 2016)。

宗教右派の高齢化と福音派若者層の意識の変化

宗教右派の影響力が低下した原因として、例えば、以下のようなことが指摘されている。まず、アメリカが人種的に多様化し続けるなかで、保守系キリスト者は白人中心のままであること。新世代 (Millennials) が政治的に台頭してくる一方で、宗教右派勢力の高齢化が進んでいる。若い世代の福音派は当然いるが、彼らは親や祖父母ほどに、一枚岩としての意識をもっていないこと。そして、もっとも基本的なこととして、宗教はアメリカ人の生活にかつてほど影響を持っていないことである。

共和党との連携において、「福音派－共和党同盟」(Evangelical-Republican alliance) を背景に、宗教保守派は、30年以上にわたり、共和党には大変忠実で、「当てにできる」有権者であった。その一方で、中絶、同性愛者の権利などのいくつかの問題を巡っては候補者に頑迷なまでの「イデオロギーのリトマス試験紙」を求めて来たのも事実である。その結果、両者に緊張感が生まれたり、また、移民政策をめぐるっては、意見の対立があっても棚上げされたりもしてきた。ただし、共和党候補者にすれば、少なくとも、中絶や同性婚などに反対を表明しておけば、福音派からの票は期待できたであろう。このような時代の流れの中、今回、クルーズ氏とトランプ氏の対決があった。

トランプ候補の躍進と今後の動向

トランプ氏は、中絶について、2011年に大統領選出馬を最初にほのめかした時に、反対を表明していた。昨年の連邦裁判所の判決で同性婚が認められたことにより、宗教右派の主要政策が行き詰まったことは認識している。また、そもそも彼はあまり聖書の言葉を使わず、また精通していないことが知られている。

移民についてのトランプ氏の発言は注目を集めたが、移民政策に対する宗教右派の立場は、賛成と反対で2分されていた。そのうち、トランプ氏は「聖書に基づく行為」として移民受け入れを訴える宗教右派指導者の発言には耳を貸さず、彼らの支援を求めることはしなかった。こうして、トランプ氏の例の強硬な移民政策案は、移民受け入れを肯定するグループの支持は得られないものの、移民に対し否定的な宗教右派の支持を得ることに成功した。

トランプ氏が、結果的に、宗教右派の一部を自らの支持へと引きつけることができた理由は、それだけではない。「意図したか否かにかかわらず、トランプ氏は繁栄つまり健康と豊かさの福音にますます心奪われる福音派のサブカルチャーにとっては最高の候補者かもしれない」(*The New York Times*, May 10, 2016)と言われる。共和党を支持する福音派には一枚岩となって中絶などの主要問題に一致して向き合うグループもあれば、より世俗的な目的を掲げその実現を目指すサブカルチャーのグループもいる。アメリカ中心のネイティヴィスト文化の復活を訴えるトランプ氏の数々の働きかけは、一般共和党員だけでなく、福音派の共和党員の間にも共感を得た。中絶や同性婚などのリベラルな社会変革に反対する宗教右派の戦いよりも、より現実的で重要な問題として響いたのであろう。

その後、トランプ氏は共和党予備選を勝ち抜いた。7月の党全国大会で正式な候補者指名を受ける。本選挙での宗教右派の投票行動が引き続き注目されるところだ。先の2012年の大統領選挙では、宗教右派の投票の約6割～8割が共和党ロムニー候補に行った(*How the Faithful Voted: 2012 Preliminary Analysis*)。今後、トランプ氏はこれまで以上に、宗教右派への働きかけを強めるであろう。その時彼の主張と、使用する表現は変わっていくのか、聖書の言葉を語りだすのか、興味深いところである。

(天理大学副学長・国際学部教授)

文学の中のアメリカ生活誌 (65)

新井 正一郎

Maryland (メリーランド) 1632年、ボルチモア男爵という称号をうけていたイギリスの貴族サー・ジョージ・カルヴァートは、国王チャールズ1世からチェサピーク湾の北部の広大な土地を下付された。この地につけられたメリーランドは国王の王妃ヘンリエッタ・マリアにちなむといわれているが、実際は国王が命名した“Terra Mariae”(「マリアの土地」)というラテン語名を英語に読みかえて Maryland としたものである。カルヴァートはそこに時代錯誤の身分に基づく男爵領社会をつくろうとした。しかし特許状を獲得する前に亡くなったので、息子のセシリアスがその植民地の初代領主になった。ボルチモア卿家は17世紀のイギリスで迫害を受けていた少数派のカトリック教徒であったので、セシリアスはメリーランドをカトリック教徒の避難地にしようとしたが、どうした理由か、その地への移住を望むカトリック教徒は少なかった。セシリアスは入植者に土地保有を保障すれば、メリーランドにカトリック教徒を呼び寄せられると思い、父の構想を廃止し、バージニアの人頭権制度に倣って、奉公人を自費で連れてくる入植者には、奉公人ひとりにつき100エーカーの土地を無償で与えた。

1633年、セシリアスは指揮官に任命した弟レナードの率いる2隻の帆船に200名の最初の入植者(大部分はプロテスタントの農民、労働者、奉公人としてきた人々)を乗せて、送り出した。出発前、彼は弟にプロテスタントとカトリックの間に対立の火種が生じないように細かく指示を与えた。翌年の春、一行はポトマック河口に到着した。レナードは町の建設に選んだ土地を、ヘンリエッタ・マリー女王の名をとってセントメアリーズと命名した。食糧や物資は近くの繁栄しているバージニア植民地から手に入れることのできたので、入植者の暮らしは楽であった。尤もその地はタバコ栽培に最適だったため、大部分の移住民は早くからタバコの収穫に手を染めた。1639年には年間10万ポンドのタバコを生産することができたので、バージニアのようにタバコを免役地代として納めることが認められた。これは country-pay 「現物貨幣」と呼ばれた。前記のように、セシリアスはセントメアリーズをカトリック教徒で満たす夢を抱いていたけれども、その後の移民もプロテスタントが多数を占めたため、同地がプロテスタント色になっていくのではないかと心を悩ませた。これが後述の信教自由を制定した理由である。それでもセントメアリーズが建設された頃は、町の要職は少数派のカトリック教徒が握っていたが、プロテスタント入植者はカトリック入植者と衝突することはまだなかった。礼拝も同一の建物で行われていた。ところが1640年代から50年代にかけてのイギリス本国におけるピューリタン革命の進行は、プロテスタント教徒のカトリック教徒が持つ町の実権への不満を大きくし、メリーランドを内乱状態に追いやりそうになった。抜け目のなかったセシリアスは、万が一プロテスタントがメリーランドの実権を握っても、カトリック教徒が迫害を受けないようにするために、1649年に異なる信仰の自由を許す法律 Toleration Act 「信教自由令」を発したが、イギリス本国のピューリタン政権は、1650年に信教自由令を廃止しただけでなく、ボルチモア卿一族の官職や所領を廃棄した。こうして1650年代の10年は、メリーランドのカトリック教徒は苦難の時代を迎える。ところがクロムウェルの病死によるピューリタン政権の崩壊とそれにつづく王政復古によって、メリーランドは再び領主植民地になり、ボルチモア卿一族は宗派を問わず多くの信者を迎え入れる政策を回復させた。中世封建社会に端を発する領主制を打破したのが

アメリカ独立戦争である。尚、ボルチモアの地名はカルヴァート家の称号 Baltimore に由来する。

エドガー・アラン・ポー（1809-1849）は、早くして孤児になり、リッチモンドからボルチモアへ、ボルチモアからフィラデルフィアへ、フィラデルフィアからニューヨークへ、ニューヨークからリッチモンドへと転々と居を変え、苦難辛酸の彷徨を続け、ボルチモアで世間から見放されたまま亡くなった異国的な作家である。堅実な生活人、着実な生活設計はポーからは縁遠いものであった。しかし、そうした彼にも安住の場、憩いの場があった。祖父母、2人の子供（息子ヘンリーと娘ヴァージニア）と共にボルチモアの古い町でひっそりと暮らす父方の叔母、ミセス・クレムの家であった。金持ちの養父から遺産相続を拒まれ、志した文学も成らず、生活の方途も尽きた彼が心の安らぎを求めて、ニューヨークからその家に転がり込んだのは、1835年頃である。彼等一家の近くに住んでいたマリイという女性が、後にその思い出をこう書いている。「最初にポー氏に会ったのは、私が17歳の頃で、ボルチモアのエセックス・ストリートに住んでいた1835年頃であったと思います。私たちの家は地主ニューマン氏の家の隣でした。彼にはやはりマリイという私と同じ年頃の娘がいました。その当時ポー氏はウエスト・ポイントをやめ、叔母のクレム夫人の家で暮らすようになったばかりでした。彼女は2階に住み、編み物や洋裁で一家を支えていました。彼等は貧しかったですが、身なりは小ぎれいにしていました。その頃のポー氏は非常に若く、後に彼の妻になるバージニアは10歳くらいのほっそりした女生徒でした。彼女の美しさは顔の表情でした。かわいらしい性質の人でした。目は青紫、髪は濃い褐色でしたが、顔色がよくなかったので、せつかくの容貌もだいなしでした」。(略) 私が『彼女はポーが好きでしたか』と聞くと、マリイは『はい、好きでしたよ』と言うのでした」。

1835年の暮れ、ポーは作家ジョン・ベルトルン・ケネヂディの推挙で『南部文芸通信』のお雇い編集者になり、バージニア州の首府リッチモンドに移り住むと、ヴァーニアへの思いを秘めた手紙をクレム夫人に送りつづけた。クレム夫人とバージニアがリッチモンドの小さな家に引っ越すのは、それからまもなくだった。1837年、彼は14歳のバージニアと結婚する。ところがこの幸せの場もその「幼な妻」が、後に彼等が移り住んだニューヨーク郊外（フォーダム）の暖のない粗末な農家で亡くなることで、苦しみと悲しみの場となる。その亡き美しい妻をモデルにつくった詩が有名な作「アナベル・リー」や「鐘」である。ニューヨーク時代の彼はそれまでの恐怖に代って死をテーマにした作品を多く書くようになった。この頃の彼はすでに長詩「大鴉」などによって名を知られるようになったものの、生活はどん底であった。が、一つ注目すべきは、自分の雑誌を持つという前々からの夢を実現したことだ（もっとも立ち上げた『ブロードウェイ・ジャーナル』は数ヶ月後には廃刊になった）。バージニアの死後の彼は、その悲しみを忘れようとするかのように酒をあびるように飲み、持病の憂鬱症の鎮痛剤として、アヘンを常用するようになったため、意識の混濁、惑乱におちいる。ところが、1848年になると、突然いろいろな女作家たち—ミセス・セアラ・ヘレン・ホイットマン、ミセス・チャールズ・リッチモンド、セアラ・ロイスター・シェルトンなど—へ長い求愛の手紙を送るようになる。F・O・マシーセンは、この期の彼を「自分が何をしているかわからなかった」と評している。これは生活人ポーにとって悲劇であったが、異邦人意識を持つ作家ポーには、詩論「詩の原理」や宇宙論『ユリーカ』のようなすぐれた評論を生む鉱脈であったようだ。

(天理大学名誉教授・天理大学アメリカス学会元会長)

アメリカス学会第 20 回年次大会
記念講演（要旨）
星名謙一郎と天理外語の鹿野久市郎
—大正期のブラジル日本語新聞にみる—
飯田 耕二郎

昨年（2015 年）5 月に発行された『天理大学アメリカス学会ニューズレター』（No.72）に「私の日本人移民史研究—天理とのかかわり—」というタイトルで書かせていただいた。その中で、星名謙一郎という人物が私のハワイ・テキサス・ブラジルを調べるきっかけになり、彼はハワイやブラジルで日本人移民の草創期の頃に新聞を発行したと記したが、ブラジルでは南米最初の日本語新聞である週刊の『南米』を発刊する。その新聞を手伝ったのが鹿野久市郎で、今回は天理大学にも縁のある鹿野を中心にお話しさせていただきたい。

まず星名謙一郎については、1866 年愛媛県吉田町に生まれ、東京英和学校（現在の青山学院）を卒業。ハワイ島に契約労働者として渡り、まもなくキリスト教の伝道師として活躍、その後コーヒー栽培やホノルルに出て税関の通訳をしながら日本語新聞を発行する。また同郷で同志社女学校出身の末光久子とハワイで結婚。しかし麻薬の密輸などさまざまな事件に関わり、長女が亡くなるなど不幸が重なったため、1904 年アメリカ本土に渡り、西原清東のいたテキサスで米作を行う。そこで長男も生まれた。夫人の父親の病気のため、農場を 1 年ほど閉鎖し家族とともに日本に戻る。1909 年に今度は単身でブラジルに渡航し、リオデジャネイロ州マカエにある山縣勇三郎の農場で、石橋恒四郎のもとで働いたりした後、サンパウロに移りプラス区の鉄工所の職工として働く。そして 1916 年初め頃、週刊の『南米』と称する雑誌風の謄写版刷りの新聞を創刊。当初、新聞発

行を手伝った鹿野と金銭の絡むトラブルで喧嘩をして別れる。1918 年末頃に『南米』を廃刊にした後、ソロカバナ線のプレジョン植民地と、さらに奥地のバイベン植民地の建設に力を注ぎ、サンパウロを離れてプレジョン植民地に住み、経営に当たる。日本政府からの低利資金借款運動の奥ソロカバナ線の代表推進役として参加するなど活躍するが、1926 年にプレジョン植民地のあるアルヴァレス・マッシュード駅で射殺される。享年 60 歳。彼はこれまでほとんど知られることがなかったが、彼の波乱に富んだ生涯について現在執筆中で、今年中に不二出版より刊行の予定であり、ぜひご購読をお願いしたい。

鹿野久市郎については、星名と共同で新聞を発行したということで名前を知る事になり、彼について気をつけていると、昭和初期に海外移民を奨励する『植民』や『海外』という雑誌にいくつか文章を寄せていることが分かった。それらのうち彼についての紹介文が掲載されている中で、彼が「天理外国語学校講師」とあったので興味がわいた。国会図書館で戦前のブラジルにおける日本語新聞のマイクロフィルムのコピーを入手し、星名と共に鹿野についての記事を注目すると、『伯刺西爾時報』に彼についての記事や連載文をいくつか見つけることが出来た。さらに昨年秋、外交史料館と東京外国語大学へ調査に赴いた。外交史料館では大正 2 年「外国旅券下付表」の東京府のところに彼の名前が載っており、本籍地は現在の鳥取県米子市、年齢は 25 歳 2 ヶ月、旅行地はブラジル、旅行目的は東洋移民会社練習生などとあり、同年 3 月末に渡航していることが分かった。次に東京外大の文書室に残されている資料のうち『東京外国語学校一覽』によると、鹿野久市郎（鳥取）は、伊語（イタリア語）学科の明治 42 年 3 月第 6 回卒業生（6 人）の内の 1 人として名前が出ていた。

ブラジルに渡った彼は輪湖俊午郎『流転の跡』などによると、耕地通訳やブラジル人に柔道を教えたりして遊んでいたとある。なお、同書によると彼は妻子を日本に残して渡伯した。その後星名と知り合い、『南米』新聞の発行を手伝うことになる。彼は文章が書ける男だったので主に編集を担当した。しかし1917年頃までには喧嘩別れで辞めたようで、現存する『南米』新聞には彼の名前は出てこない。星名と別れた後、マツグロッソ州のカンボグランデ（現在のマツグロッソ・ド・スル州の州都）のさらに奥地にあるミランダという田舎町で一時、鉄道工夫をしていた。その後、『南米』について2番目にブラジルで発行された日本語新聞『日伯新聞』に迎えらる。この新聞は1916年8月31日創刊で、金子保三郎と輪湖俊午郎の共同で、週刊、石版印刷で出され謄写版の『南米』より見栄えがよかった。しかし輪湖は半年余りで金子と意見対立して、1917年初めに辞めてしまって彼もマツグロッソ州を去り、その後、鈴木貞次郎が後任の見つかるまで編集と経営を任された。そこで当時浪人をしていた鹿野がスカウトされ、鈴木も日伯を出てしまった。『日伯新聞』が軌道に乗った頃、もう1つの強力な新聞が登場。ブラジル移民組合の御用新聞である『伯刺西爾時報』である。週刊で活字印刷、編集長は黒石清作で、1917年8月31日に創刊。そこで金子は1918年の初めに日本に帰国して、活字と印刷機を入手することになった。その間、鹿野が『日伯新聞』のきりもりをした。彼は文に優れていて評判は上がった。しかし、金子はブラジルにすでに夫人がいるにもかかわらず、印刷機と一緒に新しい奥さんを連れてきた。金子のために新聞を続けていた鹿野は興をさまして直ちに『日伯新聞』を出してしまう。金子はブラジルの夫人と別れなければならなくなり、それで人気を失い、『日伯新聞』を

三浦鑿に売らねばならなくなる。その後、鹿野は『伯刺西爾時報』にも一時期、関わりがあったと考えられるが、詳しいことは不明である。『伯刺西爾時報』の彼による連載記事によると、1919年にウルグアイやアルゼンチンを訪れている。

彼は1920年に帰国後、郷里に近い松江工業学校の英語教師などしていたが、1925年に上本町にあった大阪外国語学校でポルトガル語、スペイン語、イタリア語を教えるかたわら、雑誌『植民』の社友として南米を志す人のためにポルトガル語とスペイン語の通信教授もしていた。そして1925年に設立されたばかりの天理外国語学校へ翌26年4月、最初のポルトガル語の教師として迎えられた。天理外国語学校での活躍ぶりは不明だが、この頃はブラジル移民の全盛期で『海外』などの雑誌にその後もいくつかブラジルの農業や自分の体験談を掲載している。また、インターネットで彼の名前で検索すると『変わり学読本』（1936年発行）という本で、彼は「灯籠考証」という文章を著し、「東京外語出身、天理外語教授、刀剣研究者として知らる」と出てくる。また天理図書館に「鹿野文庫」という刀剣に関する書物のコレクションがあるそうである。彼は文章をよくして、趣味人だったことがうかがえる。

日本人移民史研究の全体から言うと、これまでハワイ・北米が中心でブラジルなど南米に関する日本人移民についてまだまだ未知の部分が多く、歴史研究は地味で大変だが、これから若い研究者にぜひやっていただきたいと願いながら報告を終らせていただく。

（大阪商業大学元教授）

アメリカス学会第 20 回年次大会

研究発表 1 (要旨)

ハワイの終戦と「強制収容」

ーホノウリウリからサンドアイランドへー

秋山 かおり

ハワイで日本人・日系アメリカ人（以下、日系人）を主な対象として行われた戦時強制収容は、終戦直後のハワイの日系コミュニティにおいて明確に認識されていたのだろうか。

この問いに対して、ハワイの日系人抑留者と、ハワイへ移送された沖縄人・日本人捕虜への日系社会のそれぞれの反応を比較対象として考察する。特に、終戦直後まで存在した日系人抑留者の詳細を追いながら、沖縄人・日本人捕虜への高い関心を示した日系社会では戦時の終わりに対する認識がどのようなものだったのかを考察した。

まず [Ⅰ はじめに] において、ハワイの戦時強制収容に関する研究史では、戒厳令（1941年12月7日～1944年10月24日）の撤廃以降も、引き続き抑留された日系人抑留者の状況が明かされてこなかったことを指摘した。

続く [Ⅱ ハワイの戦時強制収容の背景] では、以下の3点を示した。①太平洋戦争開戦当日にはアメリカ合衆国準州であったハワイに軍政府が樹立し、戒厳令により、ハワイ在住の民間人のうち、「敵性外国人」（枢軸国国民）ならびに「危険人物とみなされた人びと」（主に枢軸国国民の二世でありアメリカ市民権を持つ）が抑留対象者となった、②オアフ島湾岸部のサンドアイランドならびに山間部のホノウリウリにある二つの抑留所が中心的に使用された、③戦時を通じて抑留者数が変化していた、ことである。

本報告の焦点である戦時強制収容の収束期については [Ⅲ ホノウリウリ抑留所の機能の変遷] で概要を示した。1943年3月2日に開設したホノウリウリ抑留所／収容所は、アメリカ陸軍管轄の民間人抑留所と戦争捕虜収容所の機

能を兼ね備えた大規模な施設であった。ここでは、1944年10月24日の戒厳令撤廃による釈放またはアメリカ本土移送のため、民間人抑留者数が大幅に減少したとされてきた。

戒厳令撤廃以降における日系人の抑留者の内訳は、開戦直後の「敵性外国人」が対象とされた時期よりも多様性を帯びる。例えば、アメリカ国立公文書館所蔵の「抑留所日誌」には、スパイ行為の被疑者、僧侶、天皇制を肯定した日本人などの存在が終戦直後まで記録されている。また、オアフ刑務所から徴兵忌避者の日系二世2名が同所に移送された。彼らは日系二世のアメリカ国籍を離脱しようとした1名とともに1945年10月25日まで抑留されていた。

一方では、1945年6月末～10月頃に沖縄戦で捕虜となったうちの約3,000人といわれる人びとがハワイへ移送され、その一部はホノウリウリ収容所にいた。そして終戦を迎え、他の収容所にいた沖縄人捕虜と一括するかたちでサンドアイランド収容所へ移送されている。

この後、ハワイにいた戦争捕虜の存在が日系社会のなかで認識される過程を、[Ⅳ サンドアイランドへの視点] で整理した。1946年3月までには、オアフ島のサンドアイランドを含む3カ所の収容所に約6,000名の沖縄人・日本人捕虜がいた。サンドアイランド収容所は最も市街地に近く、戦前から家族や親族が沖縄とハワイに別れて暮らしていた沖縄系日系人にとっては、捕虜となった親族に面会する場ともなった。また、ハワイ日系人有志による慰問映画上映会なども同所で催された。同年12月に最後の日本への復員船の出航を報じるまで、日系人の戦争捕虜に対する高い関心が『布哇報知』紙上で見られた。

さらにオーラルヒストリーからは、沖縄系日系人が、沖縄人捕虜の野外作業中に禁止されていた面会に赴き、また、日本が戦争に勝利したものと信じた一部の日系人「勝った組」が捕虜

たちに接触したこともわかる。

〔V 結びにかえて〕では、戒厳令撤廃から終戦直後のいわば閉鎖期にあたるホノウリウリ抑留所／収容所は、多様な抑留者が収容されていた場所といえることを分析結果から提示した。そしてハワイの日系人が「強制収容の終わり」を認識する際には、山中のホノウリウリに残っていたこれらの日系人抑留者ではなく、その他の対象、特に沖縄人捕虜を戦後の「捕らえられた存在」として認識した可能性を指摘した。ここにおける「対象のすり替え」は、ハワイの日系社会において戦時強制収容についての明確な歴史認識が形成されなかった一因とみなすことができる。

(総合研究大学院大学博士課程在学)

研究発表 2 (要旨)

ブラジルの黄禍論再検討

矢持 善和

本発表のテーマは当初「黄禍論再考」としていた。それは、二十数年前の大学院生時代に受講していた「ヴァルガス時代の反セム民族主義」という講義科目で、ブラジルにも存在していた民族差別の動きに興味を持ったことに由来する。また、その内容は修士論文の一部に掲載し、更には帰国後ラテン・アメリカ政経学会で「ヴァルガスの時代に於けるブラジルの黄禍論」という題目で研究ノートとして発表した。その内容を自分なりに再度検討してみようという意味で再考としたが、再考という意味が黄禍論研究そのものの修正という意味を含むのではとの指摘を受け、再検討という題目に変更した。

当時のブラジルにある黄禍論研究の中で、筆者は昭和 53 年 (1978) に外務省と国際協力事業団主催で開催されたブラジル移住 70 周年記念シンポジウム「海外移住の意義を求めて」の記念講演でジョウゴ・ノムラ下院議員の発言に着目した。それは、「ブラジルの国会でも、アジア移民の入国禁止法案が提出され、採決の

時に五分五分になり、議長の投じた一票差で、辛うじて通過しなかったということがありました。…その入国禁止法案は通過しませんでした。…その後二分制限法により入国を制限された時代がありました。ブラジルでも、そういう軍国日本から来た移民に対して、多少警戒せざるをえないという考えは、私たちも当然であったと考えております」という文章である。この文章からは、下院議員という立場上やむを得ないのかもしれないが、明らかに日本人に対しての人種的差別意識は無かった、少なくともそれは軍事的警戒からの処置であったと受けとれる。

二分制限法とは、日本からの移民増加に伴い「黄禍論」という人種的偏見・差別的な理論が多数のインテリや医師によって発表された事によって、1933 年にブラジル国の憲法議会に上程され採択された法案である。この修正案第 1,164 号は、「1934 年以降、各国からの年間入国者数を 1884 ~ 1933 年の 50 年間に入国した累積数の 2 % に制限する」というもので、1908 年から移住活動が開始された日本人を制限するものであることは明らかであった。これにより 10 年来、毎年 1 万人を超えていた日本移民に対する割り当てはわずか 2,711 名に削減された

このように、ブラジルへの日本人移民の流れの初期の段階で、ヨーロッパに生まれた実証主義、進化論を含む社会的ダーウィン主義と結びついた人種的理論を日本人に向けた、主に北アメリカでの実態に多大な影響を受けたブラジルの一部のインテリ層の中で発芽した日本人移民を阻止しようとする動き、また後年、すでにブラジルに移住していた日本人に対する排斥の動きについての解説を 1942 年に出版された“O perigo japonês” (日本人の危険性) と“A ofensiva japonesa no Brasil” (ブラジルの攻撃的な日本人) の 2 冊から試みたいと考えている。

(天理大学国際学部教授)

「酒本真理子賞」を授与

天理大学アメリカス学会では、去る3月22日の卒業式当日に恒例の「酒本真理子賞」を外国語学科英米語専攻と地域文化学科アメリカス研究コースにおいて選出された最優秀論文執筆者に授与した。授与式は、卒業式式典直後に開かれた上記各コース教員・卒業生が参列したクラス会の席上挙行され、以下の受賞者2人にそれぞれ賞状と図書カード2万円分の副賞が手渡された。

この「酒本真理子賞」は、1990年3月に旧天理大学外国語学部英米学科を卒業し、1年後に志し半ばにて白血病で亡くなった酒本真理子さんの名前を冠して創設された賞である。彼女の父親の酒本昌彦氏から、「後輩の育成とアメリカス学会の出版活動に役立っていただきたい」と毎年寄付を頂戴しているが、その一部を「酒本真理子賞」として毎年卒業式当日授与している。

外国語学科英米語専攻：永尾泰子

“Differences in Communication Patterns between Men and Women: How and Why Men and Women Differ From Each Other” [英語論文]

(「男女のコミュニケーション・パターンの相違—男性と女性はなぜ異なるのか—」)

地域文化学科アメリカス研究コース：堀恵理香
「在日ブラジル人の子供たちの生活」

2016年度アメリカス学会の活動予定

◇定例研究会：7月9日(土)

恒例の天理大学アメリカス学会の2016年度定例研究会は、7月9日(土)午後2時から天理大学研究棟3階の第2会議室にて開催します。研究発表予定者および発表タイトルは以下の通り。

森田成男氏(天理大学国際学部非常勤講師)：「基軸通貨とグローバリゼーション・パラドクスの世界構造」。

◇第21回年次大会を本年11月26日に開催予定

天理大学アメリカス学会の第21回年次大会を、本年11月26日に天理大学研究棟3階の第1会議室にて開催予定。

☆新入会員：秋山かおり氏(2016年4月入会)、吉澤静香氏(2016年5月入会)

昨年度後半の活動・報告

◇第20回年次大会を昨年11月28日に開催

恒例の第20回天理大学アメリカス学会年次大会は、昨年11月28日に天理大学ふるさと会館第1・第2会議室で開催され、大阪商業大学元教授の飯田耕二郎氏が、「星名謙一郎と天理外語の鹿野久市郎—大正期のブラジル日本語新聞にみる—」と題して、記念講演を行った。また秋山かおり氏(総合研究大学院大学博士課程在学)が「ハワイの終戦と『強制収容』—ホリウリウリからサンドアイランドへ—」の題目で、また、矢持善和氏(天理大学教授、アメリカス学会元会長)が「ブラジルの黄禍論再検討」の題目で、それぞれ研究発表を行った。記念講演と研究発表の要旨は、このニューズレター6～9頁を参照。

◇新会長・新副会長着任

アメリカス学会では、昨年11月28日に開催した第20回天理大学アメリカス学会年次大会に先立つ総会の席上、木下民生新会長(天理大学国際学部教授)と初谷譲次新副会長(同教授)の着任を可決した。任期は2年。もう1人の副会長は、山倉明弘氏(同教授)が留任した。

☆天理大学アメリカス学会の2016年会計年度は、昨年11月28日に開催の年次大会当日にスタートしました。2016年度の年会費(一般会員：5,000円、賛助会員：1口30,000円)を未納の会員の皆様は、昨年12月にお届けした『アメリカス研究』第20号に同封しました郵便振込取扱票にて指定口座(下記参照)宛にお振り込みください。郵便振込取扱票を紛失された方も下記の郵便振込口座番号宛てにお願いします。

口座番号：00900-5-70364

加入者名：天理大学アメリカス学会

天理大学アメリカス学会ニューズレター
(No. 74：2016年5月31日発行)

発行者：木下民生

〒632-8510 天理市杉之内町1050

天理大学アメリカス学会

電話：0743-63-9076

Fax：0743-62-1965

e-mail: tuaas@sta.tenri-u.ac.jp

http://www.tenri-u.ac.jp/tngai/americas/